雪舟大賞の「枯蓮」　F100号　130.3×162㎝

第8回雪舟の里 総社 墨彩画公募展

雪舟大賞は宇髙健太郎さんの「枯蓮（かれはす）」

8回目を迎えた墨彩画公募展。
日本各地から応募のあった329点のなかから、
雪舟大賞以下55点の入選作品が決定しました。

■審査員

［審査員長］　上村淳之（日本芸術院会員）、［審査員］竹内浩一（日本画家）、中野嘉之（多摩美術大学教授）、福井爽人（東京芸術大学名誉教授）、守安收（岡山県立美術館副館長、上林）［敬称略］

雪舟大賞受賞者

宇髙健太郎さん（東京都台東区）

Udaka　Kentarou

冬の池の静かなゆらぎを、そこに浮かぶ枯れたハスを配して表現しました。墨を主体にして絵を描くことは、不要な色彩を極力排することによって、逆に表現したいものをより象徴的に見せます。無彩色の階調を生かし、静かな情景のなかに奥行きを感じられるような表現を目指しました。

大学院で墨の研究をしており、制作意図にあわせ自分で作った墨を使った作品です。大賞をいただけたことは、そうした意味でも今後の研究と制作の励みになります。

＜プロフィール＞

昭和56年、松山市生まれ。東京芸術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻保存修復日本画博士後期課程に在学。第7回雪舟の里総社墨彩画公募展で特選、再興第94回院展入選の受賞などの入賞歴をもつ

審査風景

「第8回雪舟の里 総社 墨彩画公募展」には、全国各地から329点（289人出品）の力作が寄せられました。6月27日に審査。雪舟大賞、平山郁夫賞（審査員長賞）、特選3点、奨励賞5点、入選45点の、計55点の入選作品が決定しました。

雪舟大賞に選ばれたのは、宇髙健太郎さん（東京都台東区）の「枯蓮」。不忍池（東京都台東区）に浮かぶ枯れたハスを題材に、静かなゆらぎを描いた作品です。審査終了後、審査員長の上村淳之さんは「じっくりと長い時間をかけ自然を見つめ、複雑な形をきちんと整理し、胸中に感じたものを描いている」と評しました。宇髙さんは28歳。前回に引き続き若手が雪舟大賞に輝きました。

平山郁夫賞（審査員長賞）には髙間貴美子さん（愛知県豊田市）の「音が聴こえる」が、特選には、よねだはるひこさん（那覇市）の「雲烟（うんえん）」、河村篤さん（滋賀県守山市）の「連（つらなり）」、藤井聡子さん（神奈川県川崎市）の「煌々（こうこう）」の3点が選ばれました。審査員から高い評価を得た雪舟大賞、平山郁夫賞、特選の5作品は、市が買い上げます。また、第1回以来、賞から遠ざかっていた軸の作品1点が入選しました。

第二の雪舟さんの誕生を願って始まったこの公募展。平成8年に第1回目を開催して以来、2年に1回のビエンナーレで継続開催してきました。今日では、日本画の登竜門と位置付けられるような公募展に成長。今回もレベルの高い作品が数多く出品され、審査員の一人は「力が拮抗していると実感した。厳しい選考だった」と審査を振り返りました。

審査員長の平山郁夫さんと、審査員の神野力さん（井尻野）が逝去され、審査では、上村淳之さんが審査員長を務めました。